

臼井真先生による練習ポイント

11月8日（日）長田区文化センター大会議室にて兵庫県全県合同練習として「しあわせ運べるように」「群青」のレッスンが、「しあわせ～」の作詩作曲である臼井真先生の指導で行われました。

「群青」から始められた臼井先生は「しあわせ～」との類似点を指摘。コード進行など、自分が「こう来るだろう」と思った通りに進む、と。やはり想いは一緒なんだなあ、と感銘を受けられたそうです。

作曲の小田美樹先生ともお話されており、東日本大震災の直後、市販の曲を指導しても生徒は誰も歌わなかった。2年の期間をおいて自作のメロディを聴かせたところ「歌いたい」と生徒の声。彼らの想いが詩に施され完成を見た、とのこと。

基本的に小田先生は自分と生徒の中で生まれた曲として、外部で指導することはありませんでしたが、曲が一人歩きして瞬く間に広まったということです。

さて、臼井先生の指導はというと、メロディパートを際立たせるのを最優先で心がけており、他のパートはその間若干押さえ気味にして、というのを徹底されておられました。

そして、タイトルの「ぐんじょう」という言葉が4回出てきますが、力強くハッキリと、ただ最後の4回目はおさめるように、との指示がありました。

「しあわせ～」は、ふとした瞬間にあっという間に曲も詩も思いついた、とのこと。福島でも「こうべ」の歌詞を「ふるさと」に変えるバージョンが広く歌われていて、「しあわせ運べるように合唱団」が東北にあるというのが「想いはひとつ」という気がして感慨深いですね♪

※その合唱団のこども達も歌いに来られるとの事です。感謝！

こちらの指導は「じしん」「つよいこころ」「つよいきずな」というワードを、拳を握りしめるように力強く。そして、「きずついたこうべ」は、まるで一人の人間のように自分の街を想う心、「いつか絶対治るよ！」という気持ちを込めて。

やはりこちらでもメロディパートが聴こえるように、他のパートはメロディを「支える」「輝かせる」という役割を演じて下さい。タイトルの「しあわせはこべるように」は一語一語ハッキリと。エンディングのフェルマータからの歌い終わりは、先生の手のひらの動きを見て。と、かなり細かい所も指示されておられました。

当日はこども達も入れて500名以上の大合唱となります。迫力のある中にもホッコリと心暖まるステージにしたいものですね。

演奏教育部 北川秀樹